

山脇東洋と徂徠學派

—『外臺祕要方』翻刻をめぐる—

はじめに

江戸中期に京都を中心として盛行した古方派醫學が、儒學における古學派の影響下に成立したことは周知のことであり、古方醫の大家山脇東洋の醫學が徂徠學に啓發されて形成されたという指摘も従来より多いが、具體的検討に乏しい憾みがある。本稿ではこの問題を考察するために、山脇東洋の最初の出版である『外臺祕要方』の翻刻をとりあげる。東洋と徂徠學派諸家との交渉の一端を明らかにし、あわせて古方醫家中の山脇東洋の位置にも言及することを目途とする。

まず山脇東洋にとって『外臺祕要方』という書籍がいかなる意義を有するものであつたかを一瞥したい。

次に同書の翻刻過程そのものが、江戸中期の學藝史の上で興味深いものであるので、未紹介の資料をも引用しつつ、翻刻の概要を詳細に見てゆきたい。

最後に山脇東洋と徂徠學をめぐる考察を加えることとしたい。

一 『外臺祕要方』翻刻の意義

山脇東洋と『外臺祕要方』

山脇東洋と徂徠學派

東洋の翻刻以前に舶載された『外臺祕要方』は、記録に残された限りでは延享當時より約五十年前の元祿十二年の一部が知られるのみである。⁽¹⁾漢籍の恆常的供給不足という物理的條件は考慮されねばならない。稀有な本を流通させるために四十卷からなる大部な本書の轉寫が繰り返されれば、誤寫が増大してゆくのは當然であり、校訂の行届いた定本に據る和刻本の需要が高かつたことは當然豫想される。だが東洋自身の問題意識に即して翻刻を考えてみるとどのような意義が見出せるであろうか。

東洋の古方醫學觀を端的に表現している言葉に「周の職を脩め、漢の術を行ひ、晉唐の方を采る」(『養壽院醫則』附録「復山内左龍」)がある。同趣旨を「翻刻外臺祕要方序」では次のようにも言っている。

夫道者唯聖者能之、古道失傳、我可得而作之乎、故仲景率由古訓、存法傳術已、長沙氏沒後、述而不作者、其唯王氏外臺祕要乎、上折管漢、下及當時、經驗方術、網羅無遺、金玉爛然、抑番方之府庫也哉、(夫れ道は、ただ聖者のみこれを能くす。古道傳を失ふ、我得てこれを作すべけんや。故に仲景、古訓に率由し、法を存し術を傳ふるのみ。長沙氏沒して後、述べて作せざるものはそれだ。王氏外臺祕要か。上、晉漢に折り、下、當時に及び、經驗の方術、網羅して遺すなし。金玉爛然として、そもそも方を畜ふるの府庫なるかな。)

町 泉壽郎

東洋の醫學觀はほぼ次のように要約できる。『周禮』天官篇の醫者の職に關する規定に醫學の根據を求め、『傷寒論』（張仲景方）を漢代當時すでに殘缺状態にあつた聖代からの遺言を古訓に溯つて保存したものと尊重し、それ以降の醫書では王肅の『外臺祕要方』を私見を混じえずに古代から晉唐までの處方を網羅した書として評價する。いにしえに理想を求め、いわゆる「述而不作」の態度である。數ある醫書のなかで『傷寒論』を基準とし、それ以外の『素問』や『靈樞』に陰陽五行説や道家説の混入をみて排除する東洋の考え方は、時流の後世方派への批判を含み、典型的な古方派の醫學思想を示すものとなつてゐる。

ともあれ漢代の『傷寒論』が古代の醫學を最もよく傳へる書である點を尊重し、常に古代醫學への溯求に價値基準を置く時に、唐代編纂の『外臺祕要方』は、單に前代の文獻を引用するのみで自説を混じえぬ撰述形態ゆゑに、佚存古醫書を豊富に含むことを以て注目されてゐるのである。『傷寒論』との關係は、六經と諸子百家（東洋は「諸子百史」という）の關係に準えられ、古代醫學を考究する際の有力な資料を提供する書だといふのである。この時の東洋に後代の考證學派ほどの古文獻保存の明確な知識や優秀な考證手腕があつたとは考えられないが、單に『外臺祕要方』記載の處方の臨床效果の有無に同書の價値を見出しているのではないことは明記したい。

清水敬長による『金匱玉函經』翻刻

『外臺祕要方』の翻刻が完了した延享三年十月に、東洋の實弟清水敬長による「張仲景方」の異本の一つ『金匱玉函經』の翻刻も完成を見た。張仲景の遺書はのちに複雑な傳承を経て、今日『傷寒論』『金

匱要略』『金匱玉函經』の三書として傳つてきてゐると考えられてゐる。三書は北宋治平年間に林億らの手で初めて版行されたが、いずれも現存しない。『傷寒論』『金匱要略』がその後もしばしば出版され、日本に傳來し、江戸時代にもたびたび和刻されて廣く流布してゐたのに對し、『金匱玉函經』は治平後ほとんど、或は全く版行されることなく、流布しなかつた。清の康熙年間には宋代の寫本が突然出現し、陳世傑によつて版行された。康熙五十六（一七一七）年のことである。

『商船載來書目』（江戸時代における唐船持渡書の研究）、一九六七年、關西大學東西學術研究所）の享保八（一七二三）年の項に「金匱玉函經 一部一套」の船載記録があり、刊行よりわずか六年にして日本に輸入されていることがわかる。

船載されたばかりの『金匱玉函經』は、早速、轉寫によつて流布していった。享保二十年に没した内藤希哲がすでに本書の重要性を説き『醫經解惑論』、香川修庵が「要略説并玉函經考證」（京都大學富土川文庫『修庵香川先生雜記』）の一文を草している。古方派醫學の伸長をここにみる事ができる。

こうした時代の潮流に棹さして、山脇東洋の『外臺祕要方』翻刻と清水敬長の『金匱玉函經』翻刻は、同時並行して、「張仲景方」の本來のすがたを考究するという同じ目的意識のもとに行われたものであつたといふことができる。

二 翻刻の概要

翻刻の概要を不すために、翻刻事業に關する未紹介の文書を掲げたい。（原文）

覺

〔蟲損〕 必要梓行華本／〔蟲損〕 者難相調候故／御本丸與御醫師望月／三英所持二付拙者在江戸之門人御醫師野呂元丈與／申者を以達而懸望仕／延享二年丑二月内證／相濟候然處二右之本三英／御願被申唐船江被／仰遣唐船持渡候而拜領／同然故以內分差越候事／難相成被相窺候處同六月／朔日加納遠江守殿江右兩人／被召呼世上之爲二候間／三英所持之本指遣爲致／梓行候様二與被／仰渡相濟申候其後／御文庫二有之候宋板之／外臺必要三英願之通／拜借被仰付校正／相濟同七月廿七日右外臺／明本京着仕候事／一翌延享三年寅十二月廿八日／御本丸江献上可仕旨／御若年寄水野壹岐守殿／被仰渡翌廿九日／御本丸江持參献上相濟候／一翌卯正月六日／西御丸江献上相濟候／一同月十三日御本丸江被爲／召書物献上仕候爲御褒美／於御祐筆部屋掾側御老中／西尾隱岐守殿御若年寄／本多伊豫守殿堀田加賀守殿／侍座二而隱岐守殿被仰渡／時服二銀十枚頂戴仕候／一同月十五日／西御丸江被爲／召書物献上仕候爲御褒美／於躰躰之間御老中／堀田相模守殿加納遠江守殿／侍座二而相模守殿被仰渡／時服二頂戴仕候／一酒井雅樂頭殿御對客二／罷出候節今度者世間之／重寶二成候書物を進獻仕／板行茂見事二能出來候／二付從／兩御所様拜領物被／仰付永々苦勞者致候半／つれ共無本望二可存との御直之御挨拶二候加納遠江守殿江／罷出候節茂右同様之／御挨拶二而其上家業宜／相勸療治致發向候由／重疊二候此上家業出情／相勸御用二相立候様二／との御挨拶二候／一同年七月右外臺必要／唐人二見せ相渡度旨／於江戸表野呂元丈相願／同月十八日御若年寄／堀田加賀守殿願之通被／仰付候旨被仰渡長崎／奉行安部主計頭殿／江者御老中堀田相模守殿／被仰渡候由二御座候以上／卯八月 山協道作

〔釋文〕

覺

(一、外臺) 必要梓行、華本「蟲損」は相調ひがたく候ゆゑ、御本丸與御醫師望月三英所持につき、拙者在江戸の門人、御醫師野呂元丈と申す者

山協東洋と徂徠學派

をもつて、たつて懸望つかまつり、延享二年丑(乙丑一七四五)二月、内證相濟み候。しかるところに右の本、三英御願ひ申され、唐船へ仰せつかはされ、唐船持ち渡り候て、拜領同然ゆゑ、内分をもつて指し越し候こと相成りがたく相窺はれ候ところ、同六月朔日、加納遠江守殿(久通)へ右兩人召し呼ばれ、世上のために候あひだ、三英所持の本指し遣はし梓行いたさせ候やうにと、仰せ渡され相濟み申し候。その後、御文庫にこれあり候、宋板の外臺必要、三英願ひの通り拜借仰せつけられ、校正相濟み、同七月二十七日、右外臺明本、京着つかまつり候こと。

一、翌延享三年寅(丙寅一七四六)十二月二十八日、御本丸へ献上つかまつるべき旨、御若年寄水野壹岐守殿(忠定)仰せ渡され、翌二十九日、御本丸へ持參、献上相濟み候。

一、翌卯(丁卯一七四七)正月六日西御丸へ献上相濟み候。

一、同月十三日、御本丸へ召させられ、書物献上つかまつり候御褒美として、御祐筆部屋掾側において、御老中西尾隱岐守殿(忠尙)、御若年寄本多伊豫守殿(忠統)、堀田加賀守殿(正陳)侍座にて、隱岐守殿仰せ渡され、時服二・銀十枚頂戴つかまつり候。

一、同月十五日、西御丸へ召させられ、書物献上つかまつり候御褒美として、躰躰の間において、御老中堀田相模守殿(正亮)、加納遠江守殿侍座にて、相模守殿仰せ渡され、時服二頂戴つかまつり候。

一、酒井雅樂頭殿(忠恭)、御對客に罷り出で候節、今度は世間の重寶になり候書物を進獻つかまつり、板行も見事にでき候につき、兩御所様より拜領物仰せつけられ、ながなが苦勞はいたし候はんづれども、さぞ本望に存ずべしとの御直の御挨拶に候。加納遠江守殿へ罷り出で候節も、右同様の御挨拶にて、そのうへ家業よろしく相勸め、療治發向いたし候よし、重疊に候。このうへ家業出情相勸め、御用に相立ち候やうにとの御挨拶に候。

一、同年七月、右外臺必要、唐人に見せ、相渡したき旨、江戸表において野呂元丈相願ひ、同月十八日、御若年寄堀田加賀守殿、願ひの通り仰

せつけられ候旨、仰せ渡され、長崎奉行安部主計頭殿（二信）へは、御老中堀田相模守殿仰せ渡され候よしにござ候。以上。
 卯（丁卯一七四七）八月 山脇道作

右の資料は、武田科學振興財團杏雨書屋に所藏される。卷子本一卷に仕立てられており、題簽に墨書して「外臺祕要方板行覺」と外題する。書式、書體、用語等から見て、『外臺祕要方』翻刻の顛末を記した、公的な性格の文書である。以下、適宜資料を補いつつ、翻刻の具體的狀況を明らかにし、ついで各論において當時の社會的、思想的狀況について考察してゆきたい。

補うべき資料は、山脇東洋の著書『養壽院醫則』に附録された文藻のほか、東洋と交流のあつた儒者、醫者の詩文集の中に散見している。望月三英に『又玄餘草』、山縣周南に『周南文集』、服部南郭に『南郭先生文集』、太宰春臺に『紫芝園稿』、瀧鶴臺に『鶴臺先生遺稿』、梁田蛻巖に『蛻巖集』、清田澹叟に『孔雀樓文集』があり、東洋宛ての尺牘や東洋の著書に寄せた序跋が収録されており、東洋の傳記に資するところが少なくない。

いま上記の資料から『外臺祕要方』翻刻に關連するものを取り出して年表化すれば次のようになる。

『外臺祕要方』翻刻關係年表

年	月	日	事	項
延享1			野呂元丈、山脇東洋に望月三英が明版『外臺祕要方』を所藏することを報知。	
(一七四四)	11		『外臺祕要方』翻刻計畫具體化。	
	12		山脇東洋、山縣周南に音信を通じようとするが、果たされず。	
			山脇東洋、望月本を翻刻の版下にすることを望月三英に要請。	
延享2	2		山脇東洋、望月三英より底本提供の内諾を得る。しかし望	

延享4	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
	冬		この頃					秋				
	1	29		28		27	21					

月本は幕府より拜領同然の品につき、幕府の許可が必要となり、これ以後協議中。
 加納久通、野呂元丈と望月三英に翻刻許可を傳達。
 望月三英、紅葉山文庫所藏・宋版『外臺祕要方』を借り出し、翻刻底本と校訂。野呂元丈も校訂作業に参加。
 望月本『外臺祕要方』、京都の山脇東洋のもとに到着。
 翻刻事業の成功を祈願して、山脇東洋、門人を伴ない北野天満宮に參詣。家塾に出版所を構えて翻刻事業開始。
 増野雲門、山縣周南の墨蹟を山脇東洋にもたらす。
 この頃までに山脇東洋の「翻刻外臺祕要方序」初稿成る。山脇東洋、山縣周南に書簡を送り、自序の斧正を依頼。
 山縣周南より山脇東洋に返書と添削を経た序文きたる。山脇序文は九月に定稿をみる。
 野呂元丈、長門石見の藥石調査のために西遊し、途中、八月に成稿した自撰序文と望月三英序文を山脇東洋にもたらす。
 翻刻事業終了。
 山縣周南、江戸の太宰春臺と服部南郭にあてて山脇東洋の紹介状を執筆。
 將軍交替（吉宗↓家重）の拜謁のために、山脇東洋、江戸に下る。
 山脇東洋、江戸城本丸に登城し、翻刻本『外臺祕要方』を献上。
 山脇東洋、江戸城西の丸に登城し、翻刻本献上。一月十三日、本丸において褒美を下賜される。一月十五日、西の丸において褒美を下賜される。
 山脇東洋、太宰春臺・服部南郭に見え、春臺より文章を得る。
 山脇東洋、山縣周南に書簡を送り、翻刻本への序文を依頼。
 野呂元丈の提案による翻刻本の清國船載が、幕府より許可される。
 山縣周南の「校正外臺祕要方序」成稿。
 山脇東洋、門人を伴って北野天満宮に參詣し、翻刻本を獻す。

三 翻刻をめぐる人々

望月三英の底本提供

以下、各論に移りたい。

『官醫家譜』(東京大學史料編纂所蔵)によれば、望月三英は元祿十六年に六歳で小普請醫の家督を相續し、享保十一年二十九歳の年に、小石川養生所加入、ついで表御番醫師にすすんでいる。八代將軍吉宗に厚遇され榮達を加えていった人物である。特に好書家の三英は、實學的學問を好む吉宗の意向をうけて、御書物御用を拜命して紅葉山文庫の醫書の校正作業に従事し、『和劑局方』『普救類方』官刻にも參畫した。この功績により紅葉山文庫の借り出しが許され、寛保三年六月十二日からは長崎に舶載された中國書籍の元値での購入を許されていた。

大庭脩氏の研究³⁾によつて明らかにされたごとく、江戸時代に舶載書は、禁令にふれる内容の有無の檢閲(書物改)を経て、作成した解題(大意書)を江戸へ送致し、幕閣の許可を得、紅葉山文庫收藏用(御用書)を除いた書物が一般の國內需要に當てられた。中國商人と長崎會所の書物目利との交渉の結果、賣買契約成立時の價格が「元値」である。このうち長崎會所における五ヶ所(江戸・京・大坂・堺・長崎)本商という本屋仲間の入札での落札時に「元値」の約三倍、店頭賣買時には「元値」の三・三倍から四倍になつていた。東洋の翻刻計畫は、三英が唐本の優先的元値購入を許された翌年の、延享元年十二月のことであるので、翻刻の底本は寛保三年六月以降、延享元年十二月以前に舶載された唐本を、時間と費用の両面で幕府からの優遇によつて入手したものであつたことがわかる。

藏書を秘匿する藏書家が少なかつた當時、三英の底本提供の態度は特筆すべきことである。これは三英自身に古方書普及への強い意向があつたからである。著書『醫官玄稿』卷二「外臺」の中でも古方書の翻刻の重要性を力説している。翻刻計畫に接して、三英個人としては異存はなかつたと思われる。三英が後年まで東洋の翻刻を高く評價していたことは『鹿門隨筆』⁶⁾に見えている。

しかし望月本翻刻には問題があつた。前述のごとき経緯で入手した同本は、いわば幕府からの拜領品同然であり、東洋と三英の私的な取り決め(内證)だけでは貸借は難しかつた。ましてそれを出版するとなれば、なおさら幕府の許可が必要になる。さらに從來注意されていなかったことが、東洋の翻刻は貸り出した望月本を、版下として直接版木に貼付して彫刻されたものではなかつただろうか。今日残されている翻刻本の覆明版としての精度の高さと、延享二年八月に開始して翌年十月までに四十巻二十四冊を完成している作業速度を、後年の醫學館での『醫心方』や『外臺祕要方』の影寫・校訂・翻刻⁶⁾などに比べると、かなりの早さと映ることから、そう推定するのである。『官醫家譜』には「御醫師山脇道作、『外臺祕要』と號す書、世上のために板行つかまつり候につき、(望月)所持の唐本を板下につかまつり候て彫りたきむね申し候」とある。恐らくこの「板下」は影寫を経ない、明版そのものことであろう。拜領品を世上のためとは言え、消却してしまうことになるわけであるから、幕府の許可を得る必要があるのは言うまでもないことである。

しかしこの關門は、幕府要路に庇護者を持つ野呂元丈と望月三英の仲介によつて殆ど障礙とはならず、むしろ幕府の允許を得て拜領品同然のものを底本とし、完成のあかつきには幕府に献上するといった晴

れがましい性格を翻刻事業に與え、一連の事業を圓滑迅速ならしめた感さえある。

野呂元丈の中國輸出提案

望月三英所藏の明版『外臺祕要方』のことを山脇東洋に報知した野呂元丈は、その企畫力・行動力をもつて翻刻事業に大きく貢献した。元丈と三英は莫逆の友であり、その最初の出會いは太宰春臺の家塾においてであつた。『又玄餘草』卷二「與呂實父書」によれば、幼くして小普請醫の家督を繼いだ三英の家計は困窮し、江戸城郭外に轉居すること度重なり、有名の上に師事することができなかったが、二十歳過ぎから赤羽川下流いわゆる芝に卜居した。三英宅に鄰接して服部南郭が芙蕖館を構え、對岸には太宰春臺が芝嶼居を構え、それぞれ増上寺の僧侶などを相手に講席を開いていた。後年反目するこの護園派の雙壁も、徂徠生前のこの時期にはまだ間隙を生ぜず^⑧にいた。

早速、兩者の講席に列なつた三英は、そこで野呂元丈や青木昆陽と相識つた。享保六・七年ころのことと推定できる。元丈はすでに郷里伊勢から上洛し、儒學を仁齋門下の竝河天民に、本草を稻生若水に、醫學を東洋の養父芸叟^芸に學んでいた。師承による傳授を重視する醫學では、「門流相續之者、至子孫互不可違爲師弟之儀」(曲直瀬玄朔『當門下之法則』)という風儀が強く、元丈は山脇家の門人に當たるわけである。稻生若水塾で同郷同門の丹羽正伯が先に享保二年に江戸に下り、幕府要路に知られて享保五年に採藥御用を拜命しており、この時、正伯の推舉によつて元丈も同年より採藥御用に參畫するため江戸に出たのである(大西源一『野呂元丈傳』、一九一五年)。

江戸日本橋の魚問屋に生まれた青木昆陽は、享保四年に上洛して伊藤東涯に學んだが、二年餘りで歸郷していた。元丈とは京都時代以來

の知友である。

享保六・七年に春臺の家塾に邂逅した三人、三英(24・25歳)・元丈(29・30歳)・昆陽(24・25歳)を見て、この時期、徂徠派が經學や詩文にとどまらず、本草學・醫學・文獻學などのさまざまな學問の領域に、大きな浸透力と吸引力を有していたことがわかる。三英と元丈の結びつきはこれに終らなかつた。小普請醫として一生埋もれて終るかに見えた三英の出世の糸口を作つたのが、元丈だつたのである(足下素因知遇是侯、乃推舉不候、特得令許延接、而厠賓客之末。『又玄餘草』「與呂實父書」)。元丈は吉宗の側近加納久通に知遇せられ、のちに處士出身として異例の官醫にまで昇つた。その一方で友人三英の學才を推轂して、吉宗の庇護のもとでの三英の累進の端緒となつた。三英は元丈の人物と才學に心服し、生涯その恩義を忘れなかつた。元丈と三英の濃やかな友情と兩人の將軍や幕府樞要との太い絆もまた『外臺祕要方』翻刻に不可欠の要素であつた。

さらに元丈は宋版(金澤文庫舊藏・紅葉山文庫所藏)『外臺祕要方』殘十一冊と望月本との校訂作業にも攜わつたらしい。校訂提案者は望月三英である(御文庫ニ有之候宋板之外臺祕要、三英願之通、拜借被仰付)『外臺祕要板行覺』。しかしその一方で元丈に『外臺祕要再校答問』一卷なる著書のあることが報告されている(松島博『野呂元丈撰譯『阿蘭陀本草和解』について』、『三重縣立大學研究年報』一九六六年三月)。「再校」の意味するところが不明だが、元丈が校訂に攜わつたことをうかがわせる。後日の調査を期したい^⑨。

紅葉山文庫所藏本は、『幕府書物方日記』(東京大學出版會)によれば、延享二年六月二日に借り出されている(一八冊・二二四頁)。「外臺祕要板行覺」によれば、その前日の六月一日に元丈と三英の兩人が

加納久通に召し出されて、版行許可を言い渡されている。翌日早くも校訂作業にとりかかっているわけである。校訂は一月半程度で早くも卒業した。校訂済みの望月本が京都の東洋の許に達したのが七月二十七日であるから、逆算すれば江戸での校訂期間はこれよりも長くはなり得ない。今日、東洋の翻刻本が「宋版との對校部は一一巻に過ぎないどころか、その巻でさえ頭注で宋版との異同を示した部分はごくわずかで、無きに等しい」としても過言ではない。したがって書扉の「宋本校勘」のうたい文字も實は名ばかりである（小倉戸洋『中國醫學古典と日本』一九九六年、塙書房）と冷評されるにいたっている所以である。

野呂元丈には時流の規格にはまらぬ氣宇壮大な行動家の側面があり、中國大陸での採藥を夢みていたという（請官欲一輩航海而探禹穴上崑崙、國禁不許、志願不遂、央々不樂『又玄餘草』「與山玄飛書」）。いくら吉宗が外國との交易や異文化の攝取に積極的であつたからとは言え、幕初以來の鎖國政策を根本的に變改する氣はなかつたであろう。しかしこうした異國への現實的感觸を伴わぬ興味は、徂徠とその一門の唐話實習の例に見るごとく、交易擴大による異國の文物の刺激をうけつつも、それが寛政期以降のように異國からの脅威を伴わない、吉宗の治下に特徴的な事態だつたのである。

こうした風潮のなかで野呂元丈によつて、翻刻本『外臺祕要方』の清國船載が提案される。無論この背景には享保度の山井崑崙・根本武夷撰、荻生北溪補訂の『七經孟子考文補遺』と、元文年間の太宰春臺の『古文孝經孔安國傳』という、足利學校の佚存宋版の校勘の、中國輸出後の高い評價が意識されている。しかし崑崙畢生の業が四庫全書や知不足齋叢書に收められ、王鳴盛・盧文弨・阮元等の考證學者に大

きな影響を與え、これに次ぐ太宰春臺の著作が、夙に長澤規矩也によつて必ずしもそれが足利本に據らないことが指摘されたが、やはり清朝で尊重され知不足齋叢書に收められたのに對して、宋本との對校の不十分な山脇翻刻本にはそういった聲聞を耳にしない。延享四年七月十八日に輸出が許可され、間もなく船載されたと考えられるが『江戸時代における唐船持渡書の研究』（一九六七年、關西大學東西學術研究所）によれば、寛延三年午七番船の持渡書物覺書に「一、外臺祕要三部各四套廿四本」、つづいて寶曆四年の『舶來書籍大意書籍成番外船』に「一、外臺祕要 一部四套 三十二本」と見えている。山脇翻刻本輸出から七年間のあいだに二度、計四部の『外臺祕要方』が船載されているわけである。冊数が前後相違し、寛延時には解題がないので版の異同を決し兼ねるが、寶曆時のものには「程敬道コレヲ重校シ」と大意書にあることから、山脇刻本の底本（望月本）と同版であると考えられる。日本にはわずかな部數しか傳來しなかつた明・程衍道版は、中國・乾隆當時には必ずしも珍しい本ではなかつたことがわかる。かつ翻刻本船載後まもなく到來した『外臺祕要方』は、翻刻本の存在によつて日本で程衍道版が珍重されていることを知つた清商が、需要をあてこんで船載したものであると推定できる。宋本との校勘が嚴密に行われていれば山脇翻刻本にも相應の評價が望めたかもしれない。考證學全盛期の中國にはその價值を認める學者が少なからず存在していたであろうから。しかしさほど珍しくない明版をそのまま翻刻して逆輸出してみても、一顧だにされなかつたのは當然の結果であつた。

山脇周南との交渉

後述するごとく、翻刻事業開始の二・三年前、四十歳少し前から急

速に徂徠學に開眼した東洋は、翻刻事業の間も徂徠學への傾倒の渦中にあつたと見てよい。そのため翻刻をめぐる人物のなかに徂徠派の著名儒者を見出すことができる。第一に指を屈すべき人物は、萩藩備山縣周南である。周南の紹介によつて春臺・南郭とも交わつた。防長出身で周南門下の多數の人々（瀧鶴臺・永富獨嘯庵・増野雲門・足立鳳洲・栗山老庵・林東溟等）が東洋に入門もしくは親炙していたことも輕視できない。

周南と東洋の交渉は延享元年に始まる。延享三年五月成稿の東洋自筆周南宛尺牘（修琴堂大塚氏藏）によれば、延享元年の足立鳳洲を介した音信は足立の病氣もあつて周南の返書を得ぬままその年が暮れ、失敗に終つた。翌延享二年秋には、一時歸郷した増野雲門が、周南の墨蹟一葉をもたらずにとどまつた。周南は足立・増野等の出京して東洋に從學中の舊門人から東洋の噂は耳にしていたが、「竊かに意ふ、亦た復た勞觀浮慕のみと。いまだ必ずしも眞才を觀ざるなり」（『周南文集』卷十「與會清介」）、よくあるディレッタントの類いと考へ、取り合なかつたのである。東洋は以後も根氣よく周南に書札を通じた。なぜ東洋は周南との關係樹立に執着したのであろうか。無論、徂徠亡きあとその高弟に道を問ふこと自體に不思議はない。まして家塾に仲介の勞を執る周南門人がある場合においてをや。

一方、『京都書林仲間記録』（一九七七年、ゆまに書房）を見ると、『諸證文標目』（第四冊所收）に「延享元年子十一月／＼外題祕要二付伏見屋藤右衛門より取候一通」とあり、『濟帳標目』（第五冊所收）に「延享元年子九月より丑正月迄／＼、外臺祕要方 素人版之事」とある。江戸時代を通じて山脇翻刻本のほかに『外臺祕要方』が和刻されたことを聞かない。しかも個人の版權所有を意味する「素人版」の語

が使用されている。右の二つの記事を山脇翻刻本に關するものと同定してよいであろう。翻刻は延享元年秋季に計畫が具體化し、京都の書肆玉枝軒植村氏伏見屋藤右衛門が作業を擔當したことを知る。

とすれば延享元年時の周南への書信は、單に徂徠派の大家への敬仰の意を表明するだけでなく、當初から『外臺祕要方』翻刻計畫を射程に置いた、多分に具體的な色彩を帯びたものであつたと豫想される。しかし周南は答えなかつた。翻刻作業のほうも前述のごとく幕府の許可にやや日時を費し、作業開始は翌延享二年八月以降にずれこんだ。

増野雲門が周南の墨蹟を東洋にもたらしたのはちようどこの時期である。周南はこの段階では東洋に格別な評價も關心も持つていない。東洋はなんとかして周南をかつぎ出そうとし、翻刻作業を進める一方で自序の撰文に腐心した。今日、翻刻本附載の同序の日付は「延享三年丙寅九月」となつてゐる。しかし前述の修琴堂所藏東洋尺牘が同年五月の日付をもち、同書中に「外臺序文一道附上」の一文があることから、このとき尺牘と序文が周南に同時にもたらされたことがわかり、序文の初稿も延享三年五月以前に溯ることになる。東洋の尺牘は「先生、たとひ賤伎に屑しとせざるも、亦た其の志（徂徠學信奉）を哀憫せざらんや」、「此の擧（翻刻事業）や、名教の存するところ、其の係はる所のもの重し。豈に驚才の能く任ずる所ならんや。此れ不佞の座して席に安んぜざる所以なり」といった、辭を卑くした、翻刻事業成功へのひたむきな氣持に満ちたものだった。周南はその意を汲んで東洋の序文を高く評價し、斧正を施した。

周南の返書と添削を経た序文は八月二十八日にもたらされた。東洋は「事、官に係はるもの一、二以外はすべて周南に服し、序文が定稿をみた（『養壽院醫則』附録「復山縣周南」延享三年十月）。

この秋から冬にかけて、序文定稿（九月）、翻刻完了（十月）、江戸下行（十一月）、翻刻本献上（十二月）と東洋は多忙を極めた。この時期、周南の役割も變化してきている。東洋は江戸滞在中に太宰春臺・服部南郭と接觸をはかりたいと考え、仲介を周南に依頼した。この年六十歳を迎え、病氣がちの周南は、自分の遺稿集刊行のことを託する書簡を兩友に草し、書中、山脇東洋のことに觸れて任を果たした『周南文集』卷十「與徳夫」、天理圖書館所藏『美濃館帖』。

東洋と春臺の交流は延享三年十二月から翌年一月の東洋江戸滞在中に始まり、五月三十日の春臺の死によって呆氣なく終った。春臺は東洋から示された文章に對して短文を草している。『春臺先生文集後稿』卷十に收める「書西京醫官山脇玄飛文後」がそれである。兩人の結んだ淡い交流の記念となった。

經學を以て自ら任ずる律氣な春臺に對して、文壇の雄と自他共に目した服部南郭は、文雅の交わりに寧日がなかったためか、東洋との關係は春臺以上に淡いものに終った。兩人の音信が復活するのは、周南が没した寶曆二年に東洋が自著『養壽院醫則』の斧正を南郭に依頼する時期を待たねばならない。延享時はわずかに一面識を得た程度で、歸洛後も無音に打ち過ごしたようである。『藏志』附録「與服部南郭一寶曆二年八月」。南郭は舊友の紹介ゆえ面會には應じたものの、それ以上の義理はないと考えたのであろう。

二月に歸洛した東洋は、過勞のためか病臥して、回復は夏・秋にずれこんだらしい。『養壽院醫則』附録「與山縣周南」延享四年七・八月ごろ。この間、江戸では太宰春臺が没し、野呂元丈が翻刻本の中國輸出實現に奔走した。書中に七月十八日に許可された中國輸出のことに言及する、周南宛て東洋尺牘は、延享四年七・八月の交に成稿した、

歸洛後、初の周南宛て書簡である。全文四百六十餘字に及ぶ同書の用件は「先生幸許貂續狗尾則可謂此書之天幸矣」、つまり翻刻本への序文執筆依頼の一事に盡きる。今日、内閣文庫に残る幕府獻納の翻刻本を見るに、翻刻時に新たに附された序文は①望月三英、②野呂元丈、③山脇東洋の三つである。當初、周南には序文執筆の依頼はなく、東洋の序の添削のみであった。この事業は幕府の許可を得て着手した、かなり公的な性格のものであったから、序の撰文は企畫立案者であり、幕府醫官や御目見醫である三名に限り、東洋と私的な結びつきがあるにすぎない一藩儒はこれに與らないという方針だったのであろう。

それが何故この時期に依頼されたのであろうか。七月の中國輸出も、江戸時代においては稀有の晴れがましい機會であった。その後間もなく序文が依頼された。こうした専門的な大部の書物にどれほどの需要がみこめたかは疑問だが、周南の序文は一般への賣り捌きを前に、自著の權威づけの意圖に出たものであることは明らかである。賣れる賣れぬはともかく、中國輸出と周南の序文とは翻刻本のいい宣傳になったことは間違いない。延享四年冬以降に刷られた翻刻本には、周南の「日本延享丁卯冬」と日付のある序文が、望月三英の序に先んじて巻頭に置かれているものが多い。

だが想像裡のこととして言えば、はじめ東洋の念頭には序文撰者として服部南郭か太宰春臺の名があつたのではないだろうか。周南の紹介状を攜えて江戸に下つた時の東洋には、そうした何らかの具體的な思惑があつたように思われる。既記のように南郭の應接は禮を失せぬ程度の通り一篇のものを出ず、短文ながら好意的な評價を得て望みを託し得るかに見えた太宰春臺は急逝した。そこで東洋は周南に撰文を依頼し、結果的には收まるべきところに收まるかたちとなつたのでは

なかつたか。東洋の一連の用意周到な翻刻の経緯をみてみると、こうした想像に驅られるのである。

四 山脇東洋と徂徠學

その一

山脇東洋における徂徠學の影響については山田慶兒氏らの先行研究があり、その傾倒の深さは徂徠の『徂徠先生學則』に體裁・思想・表現を做つた東洋の『養壽院醫則』一篇を見ればことたり。しかし東洋は徂徠に直接師事できたわけではなく、彼の徂徠學受容の具體相は實はまだ明らかにされていない。先には翻刻過程を考察して山縣周南ほかのことに言及したが、ここではもう少し時期を溯り、東洋の徂徠學との出会いをめぐる論じたい。東洋自身は幼兒の學問環境と徂徠學との出会いを次のように語っている。

不佞尙德生洛醫之家、目中所在、廩間所存、非劉張則薛李、自謂生涯之大業、止于此矣、弱冠喪父、幸賴宿儒老友之教誨、知醫有古今者、(中略) 宋後之書、束諸高閣、直溯漢唐者、十有五年于此也、齡及強仕、得物子之書而讀焉、又知道有古今者、驚喜無措、遂合轍於聖門、(不佞尙德、洛醫の家に生まれ、目中に在るところ、廩間に存するところ、劉(河間)・張(子和)に非ざれば則ち薛(己)・李(挺)なり。自ら謂へらく生涯の大業ここに止まると。弱冠にして父を喪ひ、幸ひに宿儒・老友の教誨に頼つて醫に古今有るを知る。(中略) 宋後の書はこれを高閣に束ねて直に漢唐に溯ること十有五年なり。齡、強仕に及んで物子の書を得て讀む。また道に古今有るを知りて驚喜措く無し。遂に轍を聖門に合す。)

これは未面識の大坂の醫師山内左龍から、翻刻本『外臺祕要方』を一閱して贊意の手紙を寄せられたのに對する復書の一節である。本刻

本が山内の目に觸れたのが寛延初年ごろのこと(東洋四十四歳)と推定してよいなら、宋以後の後世方派の著作を閉却視して漢唐の『傷寒論』『外臺祕要方』などに沈潜したのは、その十五年前の二十九歳のころからであり、約十年後、四十歳(或はその少し前)に初めて荻生徂徠の著作を目にしたという。「弱冠喪父」は、十八歳の時に實父清水東軒を、二十三歳の時に養父芸叟を亡くしている。「宿儒・老友之教誨」は後藤良山や渡邊葭谷の存在が知られている。或は香川修庵も加えてもよいかもしれない。山脇東洋の言を門人栗山孝庵か、或はそれに近い人物が記録したものと推定される『東洋洛語』(修琴堂大塚氏所藏、名著出版『近世漢方醫學書集成13』所收)を見るに、二十九歳ごろの古方醫學への傾斜は良山の影響が大きいことが確認できる。

伊藤仁齋の古學運動と同じく、良山の古醫方提唱も、思想の過度な思辨性に對する、率直な疑問に端を發した、物事の本質を問う熾烈な意志に支えられた獨學的な營みだったようである。東洋自身も良山について、「其の學、仁齋氏に根ざすと云ふ」(『東洋洛語』原漢文)という言葉を殘しており、良山の學風に仁齋學の影響を認めていた。だが臨床上の實効性の有無によつて高度な理論でも捨て去り、民間療法をも取り入れる良山の學風を、一應は「天下の英傑」と評價しつつも、先賢の遺著に理論的根據を徹しない恣意性には異和感を抱いたようである。良山は享保十八年九月、東洋二十九歳の年に、七十五歳で没した。良山の影響は古方醫學追究への初志という段階に止まらざるを得なかつた。

著名な人物ではないが、實父清水東軒の知人で東洋初學の師として知られる渡邊葭谷は、後年まで東洋・清水敬長兄弟と親しい關係を保つていた。渡邊葭谷については清田澹叟撰文の東洋の墓碑銘に「先

生幼受書渡邊葭谷先生者」と見え、後に淺田宗伯も『皇國名醫傳』に初學の師として葭谷の名を記す。『國書總目録』に神道關係の著作『後事録』(岩瀬文庫所藏)を載せているが、資料に乏しく、今一つ人物の輪郭をつかみ難い。ところが名醫傳を執筆する時に淺田宗伯が収集した傳記資料『皇朝醫叢續集』(國立國會圖書館所藏)のなかに、渡邊葭谷の文章數篇を確認することができた。すなわち「養壽院山脇氏醫說、醫家十則・醫家十靈」(元文五年五月)、「書崔寔政論語後」(代山脇尚德)「(元文五年十月)、「祝山脇君令嗣玄侃」(寛保三年一月二十六日)、「壽駒井宜人九十誕辰」(寶曆七年)、「詩話」(寶曆十一年春)、「先師没後送野呂生還郷」(享保十二年)である。注目すべきは、元文五年、東洋三十六歳の年の「養壽院山脇氏醫說、醫家十則・醫家十靈」「書崔寔政論語後」の二篇を、葭谷が東洋の代作をしていることである。こうした事態は江戸時代の醫者と儒者の關係では極めて一般的なことであり、それほど東洋の恥辱になることではない。ただ従来、東洋の場合、著作『養壽院醫則』や『藏志』に、本編に倍する分量の自作の漢文を附録として收め、醫學説を披瀝したり大儒との交流を誇示するなど、能文家を通つており、その東洋にしては三十六歳の時の代作は意外の感を感じるのである。

一方「翻刻外臺祕要方序」が東洋の著書に所収する漢文のうち、最も早い時期のものであることも注目される。これ以前で管見に入ったものは同年五月成稿の山縣周南宛ての初信であるが、前述のごとくこの書信と序は同時期に成稿したものである。この兩文を見るにその措辭は、多少の生硬さをとどめつつもすでに十分に古文辭流である。渡邊葭谷の文章とは全く似ない。古文辭派咀嚼以前の東洋の漢文は存在しないと換言することもできる。

徂徠の著作との出會いは寛保末年ころであり、四十歳の延享元年秋冬には早くも『外臺祕要方』翻刻計畫が緒についている。この寛保末から延享初にかけての、猛烈な徂徠學習得の時期のことをさらに詳しくみてゆこう。この時期、東洋に徂徠學を授けた人物が二人ある。共に山縣周南門下の人物である。一人は増野雲門。その経緯は周南の文章に見える。

爲不佞徒者曾清介、二三年來寓止洛下、法眼與共交驩、始聞徂徠先生之學、駭駭進、若渴驪之飲泉、(不佞が徒たるもの、曾清介、二三年來洛下に寓止す。法眼ともに交驩し、始めて徂徠先生の學を聞き、駭駭として進むこと、渴驪の泉に飲むがごとし。『周南文集』卷十一「與德夫」)

先に引用したごとくこの尺牘は、延享三年冬東洋が江戸に下る時、周南が春臺に宛てた東洋紹介の一節である。増野雲門の京都在住は寛保三年から延享元年にはじまるとみられる。既述の東洋の徂徠學開眼の時期に符合する。増野雲門は著名な人物ではなく、その學問をうかがう資料も見出せなかつたが、明和六年刊『古今諸家人物誌』にその名が見え、はじめ京都に開塾し、のちに江戸で講説した。

もう一人は林東溟である。はじめ大坂に、寛保元年からは京都四條高倉に開塾していた。關西に徂徠學を移入した最初の一人と目されている(『先哲叢談後篇』)。東溟は周知のごとく享保末年に徂徠の書簡と『譯文筆蹄』「題言十則」の和譯からなる『徂徠先生詩文國字牘』を刊行し、春臺・南郭ら江戸の護園主流の人々から「僞板」として訴えられた人物である。同郷の舊知・瀧鶴臺の辯護にもかかわらず、東溟は生涯、護園主流から白眼視され続けることになる。

東洋と東溟の交流を示す一次資料は見出せなかつたが、『先哲叢談後篇』卷五に、東洋が林東溟の塾で『史記』を聴講し、始皇本紀より

項羽本紀まで一字も漏らさず暗誦し、また話題が梅花に及ぶと梅花の詩二百首を暗誦した、という東洋の強記の逸話を傳えている。

東溟は龍草廬を中心とする詩の結社「幽蘭社」に参加しており、同社には東洋と親交のあつた清田澹叟もいた。東洋が詩文を學んだ環境がほぼ明らかになる。東溟の家塾における具體的な詩文の教授法については、著書『詩則』（『日本詩話叢書』卷九所收）に詳しい。

その二

元來、徂徠の流れを汲む者には詩文を専らとする者が多かつたのであるが、東洋が學んだ林東溟も典型的な詩文派の人物であつたことは注意されてよい。つまり東洋が徂徠學にふれて、文獻の歴史性や古代への絶對視といつた歴史哲學的なもの、文獻學的なものを學び取つたことも疑えないが、やはり漢文制作技術を習得するという點が大きかつたのではないか。いかに獨自の見解を有していても、それを表現する技術がなければ著述することはできない。醫者の著述が漢文體でなければならぬということではなかつたであろうが、『外臺祕要方』翻刻に限つて言えば、幕府の許可を得て漢籍の翻刻をする時に、和文の序ではかなうまい。それに東洋の視野には絶えず「儒中の醫」を自ら標榜する先達、香川修庵のことが、大きな存在として意識されていたはずである。修庵と遜色のない漢文の制作力を習得することが、東洋には必要だつたと推定される。

徂徠派の古文辭流の措辭は「佶屈聱牙」、難解なことで知られる。文を構成する個々の言葉に、徂徠によつて「古文辭」と認定された經史子集からの典據があるため、典據を知らなければ文義さえ通じがたく、かく古典に依據して行文するために文脈に飛躍が多く、時に文のリズムもなだらかさるを缺く。しかし漢詩文を制作する側から言えばど

うであろうか。中國語を母國語としない日本人が、古典漢文を綴るときに、典據とすべき古典と理想とすべき詩文があらかじめ定められ、模擬剽竊によつて詩文を構成することをよしとした、古文辭派の文學制作理論は、天賦の才など持ちあわせぬ大多數の初學者にとつてむしろ入門しやすく、獨創性に缺ける憾みはあるにせよ、語法上の誤まりの少ないままの漢詩文を制作するための捷徑でさえあつたはずである。

東洋に修庵に對する激しい對抗意識があつたことは、大塚恭男の「長山と東洋と修庵と——『東洋洛語』をめぐつて——」（『漢方の臨床』十九卷十二號、一九七二年十二月）に詳しい。大塚は『東洋洛語』を中心に考察をすすめて、師と兄弟子に對する東洋の見解を説いているが、東洋の「翻刻外臺祕要方序」中の次の語にも修庵批判を見出している。

學非不諱也、業非不動也、雖然、夷攷其行、術不及古人、是何邪、是矜其才辯、而自我作古之失耳、（學、講ぜざるにあらざるなり。業、勤めざるにあらざるなり。しかりといへども其の行を夷攷するに、術、古人に及ばず。これ何ぞや。これ其の才辯に矜りて、我より古を作るの失のみ。）

「自我作古」は「儒醫一本」とともに修庵の常言であり、東洋が「翻刻外臺祕要方序」で修庵批判を意圖してしたことは間違いない。

日本近世儒學における古學派は、程朱學の獨自の思辨的哲學とそれと即應した恣意的な經書解釋に對する批判として、古典の正確な理解をめざすことから始まつたが、その研究姿勢は決して今日の古代中國文獻研究のそれに直結するものではなく、學問の方法論の上で客觀的な考證の側面を持つと同時に、學問の總體として「道」とはしかじかのものであると説く、道學的性格をも併せ持つ。伊藤仁齋と荻生徂徠

はこの學術史上の位置としてはほとんど同一と言つてもよい。では徠の仁齋に對する批判はどこにあつたのか。

其言也、以意論說其精緻者也、夫以意論說其精緻者、亦取諸其臆者也、其人譏宋儒而蹈其轍、欲以聖人之所不能言者使瞭然於一言、均之亦宋儒之遺耳、(其の言や、意を以て其の精緻を論說するものなり、それ意を以て其の精緻を論說するものは、亦たこれを其の臆に取るものなり。其の人、宋儒を譏れども其の轍を蹈み、聖人の言ふこと能はざるところのものを以て、一言に瞭然たらしめんと欲す。これを均しうするに亦た宋儒の遺のみ。)

『辨名』「道」第一則

これは徠の仁齋批判の一節である。敷衍すれば、仁齋は「道」を自分の内面に照らして詳説した。しかし「心は定準なきもの」であり、いかに説いてみても結局それは臆見を逃れられず、宋儒の轍を踏むことになつた。そうではなく、詩・書・禮・樂そのものを、聖人が敢えて説明せずに具體的な「術」として提出した「道」の實體とみて、それを歴史的・文獻的事實として把握すべきである、ということになるうか。東洋の「翻刻外臺祕要方序」にも右と同趣旨と考えられる一文がある。

吾儕得俯奉其法則幸矣、何暇探繹奧而窮根源之爲耶、(吾がとがら、俯して其の法を奉ずるを得ば則ち幸なり。何の暇あつてか繹奥を探りて根源を窮むることをこれ爲さんや。)

東洋はここで徠が仁齋を批判したやり方に倣つて、修庵を批判しているのである。修庵の才學は確かに當時の醫家のなかで群を抜いていた。しかし大才を有するがゆえに、考證という大義名分のもとにしばしば古典を臆見によつて解釋、時には改變する弊に陥つた。例えば空前絶後なまでに徹底的に章節移動を行った『大學』解釋を見よ。これに對して東洋は、古典の正確な保存という意味において『外臺祕要

方』を尊重し、その翻刻を通して修庵批判を表明する最初の機會としたといえるのである。それはまた徠によつて文獻學に開眼し、不十分ながらもそれを醫學の分野に導入した、東洋の最初の自己證明の機會でもあつた。

まとめ

山脇翻刻本『外臺祕要方』は、望月三英が幕府からの優遇措置によつて入手した本を底本とし、かつ紅葉山文庫の宋版殘本との校訂(不十分なものではあつたが)がなされ、準官刻的權威を帯びた。望月本を東洋に仲介した野呂元丈は、幕閣の寵遇を背景に、一連の事業を圓滑ならしめた。しかし元丈提案の中國輸出は、底本選定と校訂の両面で不備なため、清朝においては評價されなかつた。

本翻刻の、宋版との校勘や清國への輸出は、享保度の『七經孟子考文』の成功に觸發されたものとみられ、徠の學の一部から發展した校勘・考證の學の、醫學分野における伸長の一例とみなすことができる。こうした享保・元文期の學藝の牽引力となつた、將軍吉宗の存在も見がせない。異國からの刺激あるいは異國への憧憬が學藝に積極的な効果をもたらした、吉宗の時代ならではの事象として、本翻刻は位置づけられよう。

一方、山脇東洋自身に即してみれば、同じ後藤良山門下の香川修庵に對する批判を、徠の學から學んだ理論と言語表現によつて、はじめ公表した機會がこの翻刻であつた。伊藤仁齋に儒を學び能文家でもあつた修庵は、「自我作古」と豪語して親試實驗にもとづく独自の見解を膨大な著作として公表したが、山脇東洋は古文獻に徹しえぬものを採るべきではないという主張を貫き、佚存文獻を大量に含む『外臺

祕要方』の翻刻に、また古文辭流の序文に、修庵への批判と自分の見解をこめたのである。

先に荻生徂徠が伊藤仁齋の宋學批判の不徹底を指彈して自説を樹立したごとく、山脇東洋もまた香川修庵の古醫方の恣意性を批判しつつ自らの古方醫學説を主張していった。

東洋は、山縣周南を介して太宰春臺や服部南郭といった江戸の護國派主流とも交渉をはかったが、餘り成功しなかつた。終始密接な交流を結んでいたのは、京坂在住の山縣周南門下の人々である。これらの人々の活動が、京坂に徂徠學を定着させ、踵いで京都を中心とした古方派醫學の盛行をもたらしたとみなすことができよう。

本翻刻は、江戸時代にはテキストの普及の點で一定の役割を果たしたが、もはや今日ではテキストとしての價値を有しない。むしろ古方派醫家の醫學思想上の對立を背景に生み出された本書は、江戸時代の學藝史の上で固有の價値を持つていえる。

注

- (1) 『江戸時代における唐船持渡書の研究』九八頁(『商船載來書目 自 奈字號至計字號』)に見える。
- (2) 山田慶兒「山脇東洋の思想」『啓迪』第十三號、京都醫學史研究會、一九九五年四月)、同「醫學において古學とはなんであつたか 山脇東洋の解剖學と職業および學問としての醫の自立」(山田慶兒・栗山茂久 共編『歴史の中の病と醫學』思文閣出版、一九九七年)に詳しい。
- (3) 『漢籍輸入の文化史』(研文出版、一九九七年)第六章「出船・入船」第二節「唐船の積荷が一般の目にふれる」が簡要を得ている。
- (4) 「余每慨天下學士太夫、不用志于不朽。故古方書、日亡月逸、殆幾于熄矣。不悲哉。雖萬戶之侯千金之子、書書億萬、然未聞有此學者。」(中

略) 夫書者載道之器。故書存則道昌、書亡則道廢。嗚乎道之顯晦、尚因書存沒邪。(中略) 海内好古之士、希用意不朽、亦幸哉。」

(5) 「一、山脇道作の勝れたる所へ、數百金を費して外臺祕要を板行して當時の醫學者、後世の醫學を惠む仁心、日本の爲に無てならぬ奇書尊びたる仁心、筆紙に難盡。君子莫大の功を千載に残す。浦山散事なり。」

(6) 竹田純道藏「宋版『外臺祕要方』は嘉永六年四月の二部寫寫卒業(未刻)までに四年を要した。『醫心方』三十卷は影寫校合彫刻に安政元年から萬延元年まで六年を要した。」

(7) 「不佞自幼弱屢逢世難、移居數多矣。繇不固有立錫之地。其所到之處、無東無西、皆之負廓郊外、湫隘僻遠、而不能得交接於有名之士。此其孤陋寡聞、職此之由。已及弱冠、亦復卜居于赤羽之下流、喜謂出於幽谷遷于喬木。北岸鄰美蓮之館、南岸對芝曠之居。從是稍稍得交友乎四方之士。初識足下于芝曠氏之所、青生亦在座。」

(8) 日野龍夫「服部南郭年譜考證」(『國文學研究資料館紀要』三號、一九七七年)による。

(9) 『又玄餘草』卷二「復山玄飛書」「與山玄飛書」に、著書の少ない元丈に三英が述作を憑憑したことや、元丈逝去を哀傷する言辭が見えてくる。

(10) 松島博所記によれば元丈の遺著は、「後裔で大正の頃臺灣總督府に託とめていた野呂寧氏の藏するところ」であつた。氏も實見に及んでいないらしい。寧のあとを嗣子元がついだ。

(11) 日野龍夫「近世文學史論」第二章(『岩波講座日本文學史』第八卷、一九九六年)。

(12) 『足利學校貴重特別書目解題』(足利學校遺蹟圖書館、一九三七年、汲古書院『長澤規矩也著作集』第四卷所收)に言及がある。阿部隆一にも「太宰春臺」の古文孝經について(『中央公論社』『森統三著作集』第八卷月報8、一九七一年七月、汲古書院『阿部隆一遺稿集』第四卷所

收)があつて、より詳細である。

(13) 「近歳與増子泉・足玄旨之輩交。稱先生之德、媿々不置也。始知物子死而不亡、尙可收之桑榆者。不佞之喜可知矣。鄉憑足生通獻勲於左右。適生病、不能趨候庭下、又晚一年。去秋子泉自大邦來、則贈先生之墨蹟一紙。」

(14) 書名からもその類似は明らかであるが、本篇と附録の分量比も『徂徠先生學則』の七丁半と二十三丁に對し、『養壽院醫則』の九丁と三十四丁で、ほぼ同比率。措辭もほぼ毎則、『學則』あるいは『辨名』に典據を持つ。

(15) 内藤希哲(一七〇一—一七三五)の『醫經解惑論』を太宰春臺が修訂し、賀川玄悅(一七〇〇—一七七七)の『産論』を皆川淇園が代作した。寛政期には大田錦城(一七六五—一八二五)が官醫桂川甫周(一七五一—一八〇八)や山田圖南(一七四九—一七八七)の代作をした。この役割が後に錦城門下の海保漁村(一七九八—一八六六)に引きつがれ、漁村が『經籍訪古志』の初稿に大幅な添削を加えた、等の例が知られている。

(16) 『護國雜誌』(續日本隨筆大成4所收)および『先哲叢談後編』卷五。また河村一郎の『長州藩思想史覺書——山縣周南前後』(一九八六年、私家版)林東溟の章に詳しい。

(17) 香川修庵の『大學』注釋に『大學叢』があり、所見の十種のテキスト(古本・石經・二程・朱熹・方孝孺・張鼎思・管志道・葛寅亮・伊藤仁齋)を集成し、自説『大學正本』を附している。修庵の説は師仁齋の説を踏襲する部分がある反面、大幅な章節移動を行つて一篇の首尾一貫を試みている。詳しくは拙論「香川修庵の『儒醫一本』の儒について——『大學叢』を中心として——」(『日本醫史學雜誌』第四十四卷第一號、一九九八年三月)を参照。